

幼年期の意味するもの

本田 和子

昨年夏上映された劇場映画『漂流教室』は、映画としての作品の出来映えは別として、幾つかの点で興味深い問題を投げかけていた。その多くは、異能の劇作家榎津かずおの原作に負っているが、キャスティング、映像効果その他は、監督大林宣彦の抒情性に依存するところも少なくない。原作の衝撃性が甘くゆがめられたという批判はあるものの、そのゆえに浮かび上った親と子の問題や、現代における成長観など、私どもの目に示唆的と見えることがらを無視してはならないだろう。

とりあえず、そのあらすじを辿ってみよう。ドラマの



主人公は、翔という少年。外国人子弟と帰国子女とが学ぶ神戸アメリカンスクールに通う中学生である。そのアメリカンスクールが、ある日、突然、一九九名の生徒と、何人かの教師を抱え込んだまま、一瞬の閃光とともに消滅した。タイム・スリップして異次元に拉致されたのである。子どもたちを気付かって半狂乱となる母親たち。なすすべもなく絶望する教師たち。そして、何とか自分たちでその苦境を切り抜けようとする子どもたちは、とりあえず翔をリーダーに選んで、自治的に自分たちの生活を守っていこうと考える。残された大人たち、とりわけ翔の母親は、悲嘆にくれ、絶望し、諦めかけ、やがて、自分たちの手の届かぬところで新しい生活を始めたらしい子どもたちを信じることで、辛うじて希望を見出し、わが子とのコンタクトをまさぐり始める。

砂漠のような別天地で、危険と戦いながら自分たちの生活を築き始める子どもたちの群れと、翔のかたみとなったペンダントを握りしめて、願い、祈る大人たちの姿とを、交互に見せつつ、映画の幕は下ろされるのだ。



この映画が発信する第一のメッセージは、大人と子ども、特に母と子の関係が、「切断」という過激な手段を介して再生され得たということである。母は子を、変りなく抱きしめていたいと願いつつ、同時に一人前に立ち立て欲しいと望み、子もまた、母の膝に甘えていたいと求めつつ、同時に自分の足で好みの方向へ歩きたいと考える。結び付くことと切り離されること、この両極に引き裂かれるのが両者の関係に他ならない。

このことをめぐって、グレートマザーの両義性とか、あるいはダブルバインドなどと、様々な理論が展開されている。しかし、この映画は、それら母と子のダイナミズムを、タイム・スリップによる「切断」という形で、鮮かに処理して見せた。タイム・スリップして手の届かぬ世界へ漂流してしまった以上は、母も、子も、両者ともどもどんなに求め合おうと、あるいはどんなにいがみ

合おうと、どうにもならない形でそれぞれの独立を全うすることになるのだから。

考えてみるなら、母と子は、異世代を生きる者として、永遠に両者の時を共有することは許されない。子どもだけが母の知らない世界に入り込んで行き、母の知らない世界を生きるのだ。映画は、タイム・スリップという形で、この不可避の別離を衝撃的に映像化した。深く暗く巨大な穴の傍で、校舎もろとも子どもたちを呑み込んだ裂け目をのぞき込み、しのつく雨に全身を濡らしながら空しくわが子の名前を呼ぶ母親の姿が、この切断の無慈悲さと、残された者の悲しさをよく表現している。

親子の間に横たわるこの関係は、考えてみれば、人間の抱え込んだ基本的・根源的な主題でもあった。とりわけ、その主題に関して、母親が特権的であるのは、彼女は、「個体の分離」という事実と、それによって生じる課題とを、乳児と不可分に共有したからである。小浜逸郎の言を借りて、「母子の分離は、その事態に対するあらゆる文化的な色づけをとりはずしたかぎりでは、自立

した個体がそれまでもっていた完全性の喪失という実存的意味をもっているのであって、これはそれ自体として普遍的に祝福的なことをいうのでもなければ、あえて苦役にみちた現実だと思ってみる必要もない事態である。要するにそれは、分離してしまったことによって、その代償として関係的にあらねばならぬという、あともどりのきかない主題の出現をあらわしている」と言うことも出来よう。個体としての身体は、「出産」という「分離」によってしか出現し得ない。しかし、分離は、それまでの充分性の喪失であり、母と子は、両者ともども「欠除」を刻印され、結果として「結合」という形の充足を要求するというのだ。

「分離」と「結合」、この両義性において人間は肉体的存在となる。しかも、この基本的条件は、「出産」という形の、母と子の同時的な受肉によって発生するのである。従って、人生という経過する時間の中で、母と子の間に生じる葛藤のあれこれが、その節目として刻印されるのも、無理からぬことなのだ。深層心理学者たちが分

析して見せるように、各地に分布する神話や昔話は、成長の途上に「母親殺し」を敢行する若者の姿を描き出し、「分離」と「結合」というこの主題が、人間に課された根源的な主題であると告げているではないか。

ところで、『漂流教室』に視線を戻すなら、変化の速度の速い現代は、この根源的な主題との取り組みに、一きわの困難さを増し加えさせているように見える。子は、子自身の時代の速度に身を委ねる。しかし、それが、恰かも必要以上に分離を促進するかに見えるとき、親にとって承服し難いものになる。つまり、「子どもがどん／＼離れ去っていく」という歎きと憤りを誘い出し、つなぎ止めようという力を引き出してしまふのだ。

パソコンに象徴されるテクノロジーの時代、ビル群に代表されるコンクリートの時代、そして、人工衛星で示される宇宙の時代、様々に言い立てられるこの変貌の時代に、戸惑いと不安を隠し切れぬ親たちに比して、子どもたちは易々とそれに適応し、変化の速度を共有して事もなく駆け抜けていくではないか。「子どもがわから

なくなつた」と、親世代を憂えさせるのはこの所以であろう。

親世代は、何とか子どもを繋ぎとめようと躍起になる。映画の冒頭で提示された母と子の葛藤は、それを物語る。日本語を学んで日本人らしくと督励するのは、母世代の価値観へと、子どもを繋ぎとめる行為である。子どもにとって、そんなことはどうでもよいにもかかわらず……。それでいて、母の口からは、「しっかりと」「早く」「自分でちゃんと」と、息子に一人前に振舞うことを求める叱声が、次々とこぼれ出る。そして、最後に投げ付けた科白が「出て行きなさい」の一言。この一言は、母にとって終生の悔いになるのだが、しかし、母の内に潜むいま一つの本音でもあった。別世界の異邦人たる息子たちと、いつまでも時間を共有することは出来得ないのだから。

反抗し、背を向け「帰ってくるもんか」と捨て科白まで口にして飛び出していく息子。彼にしてみれば、外国で育ったから日本語が苦手で、日本的な生活になじめな

いのは当り前すぎるくらいに当り前のこと。何故そんなに怒られねばならないのか。「しかたないじゃないか」「望んで外国で育ったわけじゃないのに」と、彼は母との間に一線を引く。両者に横たわる越え難い裂け目に、先ず気付いてしまったのは息子の方かも知れない。

両者のいさかいを見ていると、加速度がついて動き続ける時代と、そのゆえにあらわとなる世代間の問題が、いや応なしに意識させられよう。母たちの立つ地盤と、子どもらのそれとは、異なった速度で動いているのだ。「わかつちやいなんだもん」と呟く子どもたちの耳は、二つの時間が、それぞれに異なった速度で流れ続けるその音を、もの憂く抱えているのかも知れない。

タイム・スリップという形で出現した異常事態は、「分離」と「結合」という根源的な主題を前にして、その取り組みに感う現代の母子に対して、鮮烈につきつけられた一つの答ではないだろうか。恰かも天災のような不可避性、絶対的な訣別……。新しい事態を認めて、すばやく対応を開始するのが、母たちにままして子であると

は、「時代の速度」によって鍛えられ、不可避の断絶に自覚的であった子世代のありようを物語るだろう。もしかしたら、タイム・スリップとは、神話の主人公たちの「母殺し」に代るものではないか。心優しき現代のヒーローたちは、母に立ち向かうのではなく、彼女たちを置き去りにして、時の彼方へと旅立って行くのかも知れない。



ところで、このドラマの中に、一人紛れこんだ「三才」の勇一だけは、母の許に帰る機会を与えられていた。翔の後にくっついてきたら、タイム・スリップに巻き込まれたというこの幼い者は、そもそもから「異邦人」である。本来はいる筈のない所、すなわちアメリカンスクールの校舎の中に、何故か紛れ込んでいるのだから。しかも、水のない砂漠のような世界での明け暮れにも、彼だけはいつも洗い立ての爽やかさで、ニコニコと

笑っている。「あの子だけ、どうして砂にも塵にも汚されないのだろう」と、他の子どもたちはいつも不思議がった。

そして、彼だけが、光の龍巻きに身を委ねて、もとの世界に帰っていった。「君はまだお母さんが必要なんだよ」という翔の言葉に送られ、翔から貰ったペンダントを胸にかけて……。残された家族たちは、勇一の帰還と胸に揺れるペンダントによって、子どもたちの無事を知ると同時に、子どもたちが手の届かない世界に行ってしまったことも……。しかし、彼らは幼い勇一を囲み、彼のあどけない呟きに耳を傾けることで一種の安息を見出すのだ。子どもたちの独立を信じ、それを祈念しようという母たちの解決は、勇一によってもたらされたとも言えよう。

母と子の関係や思春期のありようをめぐって、ラジカルな問いを連発したこのドラマは、しかし、幼い子どもに関して、極めて伝統的な幼児讃歌を奏でて見せた。「七才までは神のうち」、彼らは、どんな時代にも、どん

な状況下にも、変ることなく「異邦人」であり続ける。

つまり、時代や状況によってもたらされる、あらゆる束縛から逃れ得てい、様々な限界から自由であり得るということなのだ。勇一だけは、ニコニコと、何の苦勞もなく、二つの時間を往還した。タイム・スリップした翔たちの時間と、残された母たちの時間と……。そのいずれの時間の中にも、彼はやすやすと入り込むが、同時にどちらの世界でも特別扱い、つまり「異邦人」なのだ。

伝統的社会は、この「異邦人」に、「神のうち」というしるしを与えた。七才を境として、産神から氏神へと守護神が移行するという民間信仰のあり方は、共同体への仲間入りの節目として、「七才」が特異化されていたことを物語る。そして、共同体は、この労働人口にも入り得ず、共同体の成員外である幼い者たちに、神事に携る者という特別の役割を付与した。幼い者たちは、神を招き神を迎える導師として、あるいは彼ら自身が神のよかしら依代となつて、祭式時に欠けがえのない責務をになわされたのであった。

伝統的社會で「異邦人」と記号化され、そのゆえに「神のうち」と聖性を付与されて、独特の位置を与えられてきた幼い者たちは、私どもの社會で、どのような變貌を遂げたのであろうか。結論を急ぐなら、大まかに言つて、彼らの地位はさほどの變化を見せてはいない。何故なら、「子ども期」の解体、「子ども」と「大人」の關係の變化など、様々に論議の対象となる現代にあつても、「幼児」と呼ばれる幼い人たちに關しては、さほどに言挙げされていないではないか。

生育環境がこれほどに變貌する。すなわち、木や土に代るコンクリート、映像の氾濫、人工的な衣類や食物などに囲まれて育つ彼ら。その成長ぶりや、生活感覚が、かつてと同じであつたらむしろ不思議であろう。従つて、當然のことながら、それらとの關係での變貌が、彼らの上に現われるのは自明である。

しかし、にもかかわらず、人生の最初の時期を生きる「幼い人たち」と、私ども大人とが取り結ぶ關係のありようには、何ほどの變化も見出せないのではないか。

「幼い人」の上限に多少の移動があつたにせよ、彼らは依然として制度の外に置かれ、秩序社會の「異邦人」と記号化される。以下に、現状での異人ぶりを、現代社會との關係で指摘しておこう。

子どもが變つたと欺かれるとき、變貌の指標として選ばれるものの一つが、遊びの減少である。しかし、これは、彼らが、かつて大人たちが遊んだ伝統的な遊びから遠ざかり、代りに、パソコンやハム、あるいはサッカーなど、新しい遊びに没頭するということである。コンピュータやワープロは、もと子どもだった大人たちにとつては、真剣にマスターせねばならない新しい道具であつて、とうてい遊びとはなり得ないのだが、彼らはそれを易々と遊んでしまう。子世代と大人世代は、共有し得ない「遊び」を間において、その断絶をかみしめる。

しかし、このとき、幼い人たちは兩者を結ぶメディアーターである。彼らは、機会さえ用意すれば「かごめかごめ」や「鬼ごっこ」など、昔なつかしい伝統遊びにも打ち興じ、また、一方では、パソコンにもなじんで見せ

て両界を往還する。子どもたちが、人よりも機械を愛することが話題となり、人間性の危機とそれが憂えられるとき、幼い人たちは依然として大人の膝にすり寄ってくるし、抱かれることを好み、柔かい頬をくつつける。手はつなぐものとはばかり大人たちの両掌を求め、足は跳びはねるものとばかりに軽やかにステップを踏む。

何といっても彼らは頼りなく弱く、そして、あどけない。大人の保護と愛撫が必要な存在であることに変わりはない。抱き上げ、食物を与え、依類を整え、よくも悪くも大人の思いのままに扱える対象。というわけで、幼い人たちは、依然、「対等の人」としてではなく、「愛すべき天使あるいはペット」のように位置づけられる。ただし、この「ペット」には、格別、マイナスの意味はない。大人が、一方的に愛着行動を表明し、実現し得るという意味で、幼い人は常にペット的でもあるのだから。

彼らは「義務教育」の外にあることで、近代学校教育「の外にあることで、近代学校教育という巨大装置から自由であるし、制度的拘束のゆるやかさを利用して、

幼児教育もしばしば教育界の「異邦人」たり得る。結果として、彼らは時代を超え、時流に流されない。というより、日常的現実を足を下ろしていないから、彼らだけの「特別の現実」を、いつでも、どこでも、享受してしまうということかも知れない。

『漂流教室』は、幼い勇一を、ただ一人の帰還者として特別に描き出すことで、現代における「異邦人」ぶりを鮮明にして見せた。しかも、彼が翔のペンダントを胸にかけ、ニコニコと母の許に帰り着いたことで、大人たちの上に安らぎが訪れている。彼は単なるメッセージャーだったのではなく、救済者でもあったのだ。置き去りにされたものを慰め、一沫の希望を与え……。翔の両親やその他置き去りにされた親たちが、幼い勇一を囲んで静かに団欒する情景は、安易なこしらえものの感はあるものの、やはり象徴的であろう。この情景は人にとって「幼いもの」が存在することの意味を甘美に謳い上げ、どのような時代にあっても、それは不変であると訴えているのだから。

(お茶の水女子大学)